「すべての人に宣べ伝えよ」

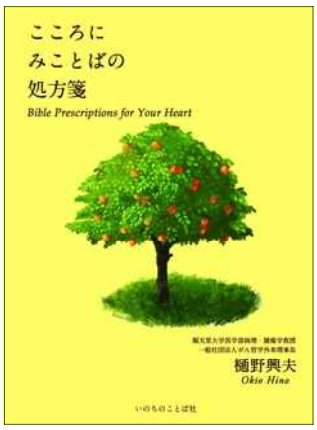
（マルコ13:5-13）

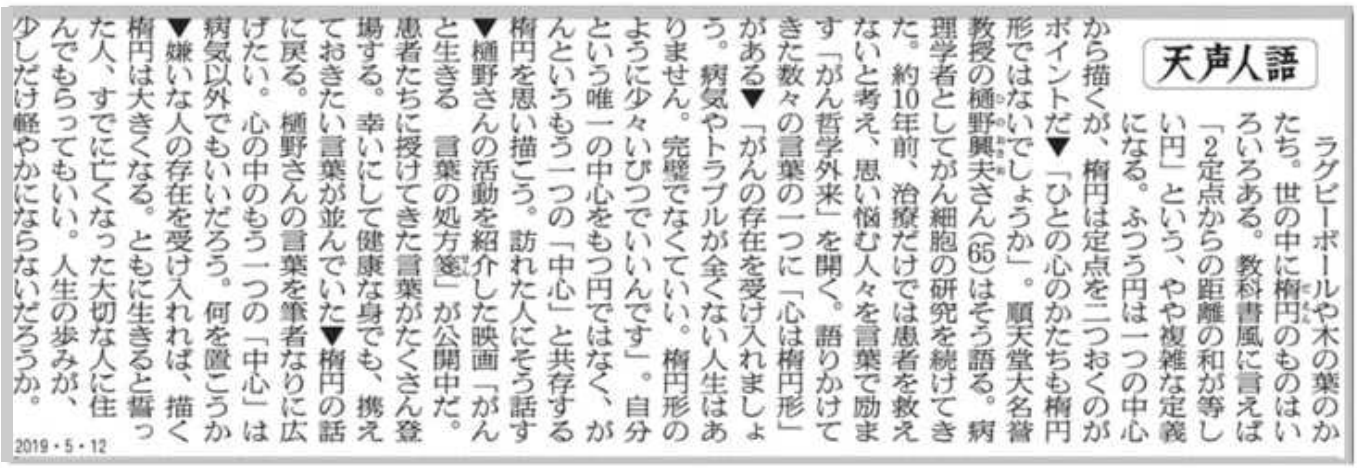
挽地茂男

2019.5.19 日本基督教団千歳丘教会

先週からこの夏の講演会に講師

としてお迎えする樋野興夫先生（ひの おきお、1954年-）のことを少しずつお知らせしておりますけれども、朝日新聞の５月１２日の「天声人語」が樋野先生のことを取り上げております。受付のテーブルにも用意させて頂きましたが、読ませて頂きます。〔読む〕樋野先生の言葉は、がんを適切に治療しつつ、がんを単なる異物や悪者として駆逐することだけを考えるのではなくて、がんと自分が共存することを説きます。そして生かされているその生命を、外に向かって人々のために用いていくことを奨励するのです。樋野先生は、吉田富三などがん研究の先人たちの他に、南原繁、新渡戸稲造、内村鑑三、矢内原忠雄といった信仰者であり同時に日本のリーダーであった人々から大きな影響を受けたキリスト者です。特に新渡戸稲造には敬愛の念を強くもっておられるようで、『われ２１世紀の新渡戸とならん』という本が出版されています。現在「がん哲学」関係の本は２５冊出版されていますが、その中には『こころにみことばの処方箋』(2015)といったタイトルからも分





天声人語

ラグビーボールや木の葉のかたち。世の中に楕円のものはいろいろある。教科書風に言えば「2定点からの距離の和が等しい円」という、やや複雑な定義になる。ふつう円は一つの中心から描くが、楕円は定点を二つおくのがポイントだ▼「ひとの心のかたちも楕円形ではないでしょうか」。順天堂大名誉教授の樋野興夫さん(65)はそう語る。病理学者としてがん細胞の研究を続けてきた。約10年前、治療だけでは患者を救えないと考え、思い悩む人々を言葉で励ます「がん哲学外来」を開く。語りかけてきた数々の言葉の一つに「心は楕円形」がある▼「がんの存在を受け入れましょう。病気やトラブルが全くない人生はありません。完璧でなくていい。楕円形のように少々いびつでいいんです」。自分という唯一の中心をもつ円ではなく、がんというもう一つの「中心」と共存する楕円を思い描こう。訪れた人にそう話す▼樋野さんの活動を紹介した映画「がんと生きる　言葉の処方箋」が公開中だ。患者たちに授けてきた言葉がたくさん登場する。幸いにして健康な身でも、携えておきたい言葉が並んでいた▼楕円の話に戻る。樋野さんの言葉を筆者なりに広げたい。心の中のもう一つの「中心」は病気以外でもいいだろう。何を置こうか▼嫌いな人の存在を受け入れれば、描く楕円は大きくなる。ともに生きると誓った人、すでに亡くなった大切な人に住んでもらってもいい。人生の歩みが、少しだけ軽やかにならないだろうか。

2019・5・12

かるように、先生の発言には聖書の言葉や思想・発想が直接・間接に著作の随所に出てきます。

先生の著作の中に『人生から期待される生き方』(2017)という本がありますが、がん患者とその家族が、がんという病気にどのように対処すればよいのかを、がんとの向き合い方、最も大切なこととして、人生に対する考え方の枠組みの転換の仕方について穏やかに語っていきます。この本の表題になっている「人生から期待される生き方」という発想は、もともとフランクルの『夜と霧』という本の中に出てくる発想です。フランクルは第二次世界大戦中アウシュヴィッツ収容所に収容された精神科医です。そこでは絶望の果てに、栄養失調と過酷な労働の末に人々が毎日死んでいく。人生には何も期待することができない。絶望そのものを絵に描いたような日常。そのような中でフランクルに精神の大転換、彼が言う「コペルクス的転換」が起こります。問題は「我々が人生に何を期待できるかではなく、人生が我々に何を期待しているか」ということだ、という真理に行き着くのです。そして今生かされている人生を、その生命を懸命に、自分のために、人のために行き始めるのです。

樋野先生の『「今日」という日の花を摘む』(2016)や『いい人生は、最期の5年で決まる』(2017)や『人の心に贈り物を残していく』(2017)といった本は、がんを発症した患者さんが、自分とがんとを二つの定点(中心点)とする楕円を作って、がんと共存しながら、与えられた、しかも限りある生命を、楕円の外に向かって力強く生きることのできる可能性を示し、そう生きることを勧めます。〔先生は「悩んでいるのは1日1時間で十分。それ以上悩んでも何も良

いものは出てこない」として、患者さんにボランティアをするようにさえ勧めます。〕

わたしたちは今マルコによる福音書の１３章を読んでいます。本日の箇所である５節から主イエスの「黙示的説教」が語られます。この箇所は「小黙示録」と呼ばれていて、小さくても黙示録ですから、世界の終わりが語られます。そして、その世界の終わりは、次の１４章から始まる受難物語の描く主イエスの生涯の終わりと二重に重なり合います。「小黙示録」は二重に重なり合いながら、受難物語の背景を形作ります。さてマルコ１３章５－８節。主イエスは世の終わりの前兆について語り出します。

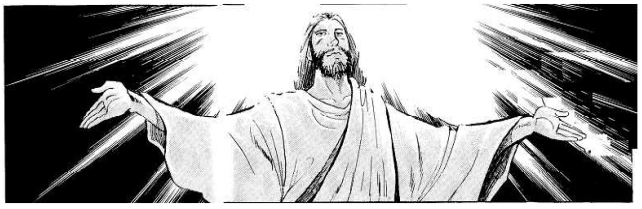
13:5 イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。13:6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。13:7 戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。13:8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。

5-6	編集(＋伝承)	βλέπετε
7-8	黙示的資料	
9-13	編集(＋伝承)	βλέπετε
14-20	黙示的資料	
21-23	編集(＋伝承)	βλέπετε
24-27	黙示的資料	
28-37	編集(＋伝承)	βλέπετε

主イエスの「黙示的説教」は「気をつけなさい」（ギリシア語の本文）という言葉から始まります。この「気をつけなさい」（βλέπετε）という言葉は、主イエスの「黙示的説教」を構成している、キーワードなのです。５節と９節と２３節と３３節に出てきます。つまり本文をよく観察してまいりますと、主イエスは世の終わりのことを語りながら、再三再四、弟子たちに「気をつけていなさい」と注意を呼びかけているのが分かります。そして、その注意は、二つの内容にまとめることができます。

一つは、偽キ

リストや偽預言者の偽りの教え、つまり邪説に「気をつけていなさい」と注意を促します。もう一つは「苦難と忍耐」について、つまり終わりの日が来るまでには必ず迫害と苦難が襲ってくるが、信仰を堅くもって、それに耐えるように「気をつけていなさい」と、語っているのです。そのために「気をつけていなさい」という言葉――すなわちギリシア語の βλέπετε（ブレペテ）という〔英語のwatchにあたる〕言葉――が連呼されているのです。今、読みました１３章の①５節。「人に惑わされないように〈ブレペテ〉気をつけなさい。私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』（Ἐγώ εἰμι＝私がキリスト[メシア]だ）と言って多くの人を惑わすだろう……」。さらに②９節を見ますと、「あなたがたは自分のことに〈ブレペテ〉気をつけていなさい。あなたがたは地方法院（サンヘドリン）に引き渡され、会堂で打ちたたかれる……」。さらに③２１－２３節。「そのとき、『見よ、ここにメシア（＝キリスト、原語 ὁ Χριστός）がいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。偽メシア（キリスト）や偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。だから、あなたがたは〈ブレペテ〉気をつけていなさい。一切の事を前もって言っておく。」そして４つ目の〈ブレペテ〉が④３３節に出てきます。〈ブレペテ〉気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。「気をつけていなさい」にプラス「目を覚ましていなさい」が付加されて「気をつけて、目を覚ましていなさい」と注意を呼びかける警告・勧告の調子がより強くなっています。



実際、この１３章は黙示文学的な表現やイメージをたくさん使っていますが、むしろ非常に警告的性格あるいは勧告的性格が強い文書なのです。ある新約学者（C.H.ドッド）は、この部分を、黙示的用語を用いた主イエスによる「勧告的説教（hortatory address）」と呼んでいます。つまり黙示録の

もつ終末的な緊張感を背景にして、今生きている時がどんな時であるのかに「気をつけていなさい／目を覚ましていなさい」と警告・勧告を発しているのです。

実はこの「小黙示録」は、黙示録に頻繁に出てくる戦争や、地震や、飢饉や、自然の異常現象や、天体の破壊といった黙示文学的・終末的なイメージを繰り返し語ります。がしかし、この「小黙示録」は、終末の時期(カレンダー)やその前兆にこだわる黙示録の思想圏内には、実は、もはや立っていないのです。この福音書を書いたマルコの視野の中には、当時すでに進行中の「ユダヤ戦争」(66-70A.D.)が入っていると考えられます。つまりマルコは、戦争のうわさと終末の到来を直結させることによって生じる危険性に警告を発しているのです。７－８節。

ユダヤ戦争の末期70A.D.,ローマ軍によるエルサレム破壊

13:7戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。
13:8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。

戦争の混乱や騒擾の中で、襲ってくる迫害と苦難によって忍耐が限界に近づくとともに、偽キリストや偽預言者(v.5-6,21-23) が信仰者にとってどれほど脅威になるかは、想像に難くありません。信仰者も偽りの教えに望みを託し、真に信ずべき方を見失ってしまう可能性があるのです。マルコは、そのような終末的な緊迫感を背景にしながら、神の民に向かって、主イエスの言葉をなげかけるのです。「気をつけて、目を覚ましていなさい。」

偽キリストは「『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わす」と言われています。この「わたしがそれだ」(Ἐγώ εἰμι エゴー・エイミ。英語では“I am”)という言葉は、神さまが人に自分を顕すときに使われる言葉(神の顕現定

式)なのです。例えば、出エジプト記３章１４節で神がモーセに自らを顕す場面をギリシア語訳(70人訳)旧約聖書で見てみると、こうなっています。出3:14　神はモーセに、「ἐγώ εἰμι エゴー・エイミ. わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」

福音書でも(主イエスが特別な場面に姿を現すときの)顕現定式として使われます。(1) マルコによる福音書６章５０節(マタ14:27‖ヨハ6:20) で、主イエスは、嵐の湖を歩いて弟子たちの乗っている舟に近づきます。弟子たちは幽霊だと思い恐怖にとらえられます。その場面で主イエスの口から、この言葉が語られます。6章５０節。マコ 6:50 皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、「安心しなさい。ἐγώ εἰμι（新共同訳「わたしだ」）。恐れることはない」と言われた。また(2)マルコ１４章６２節(ルカ22:70)では、裁判の席で大祭司の「お前はほむべき方の子、キリストなのか」という審問の言葉に対してこう答えます。マコ14:62 イエスは言われた。「ἔγω, εἰμι（新共同訳「そうです」)。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る。」さらに、

(3)ルカ２４章３９節では、復活した主イエスが弟子たちに現れる(復活顕現)場面に出てきます。ルカ24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしく ἐγώ εἰμι（新共同訳「わたしだ」)。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。

わたしたちが今日読んでいる(4) マルコ１３章６節(マタ20:15／ルカ21:8)でも同じ使い方がされています。神や神に等しい存在が現れるときに使われる表現(ἐγώ εἰμι)が使われているのです。マコ13:6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『ἐγώ εἰμι(新共同訳「わたしがそれだ」)』と言って、多くの人を惑わすだろう。〔ちなみに並行個所のマタイ福音書24:5は Ἐγώ εἰμι ὁ Χριστός

「わたしがキリストだ」と「キリスト」という言葉を補っています。〕

「戦争の騒ぎや戦争のうわさ」が人々の心を揺さぶります。「民は民に敵対して立ち上がり」(v.8)民族紛争が頻発します。さらに、国際紛争が勃発し「国は国に敵対して立ち上が」るのです。そして地震や飢饉といった自然災害が人々の生活を破壊します。このような戦争(戦乱)や自然災害の勃発と終末の到来を直結させることによって増大する切迫感の危険性に、(マルコの)主イエスは警告を発しているのです。このような社会的大混乱（アノミー）に襲われるとき、偽キリスト(＝偽りの救い)への傾斜が加速するのです。

しかし主イエスは言われます。「これらは産みの苦しみの始まりである」(v.8)。わたしたちは「産みの苦しみ」の「苦しみ」に気が

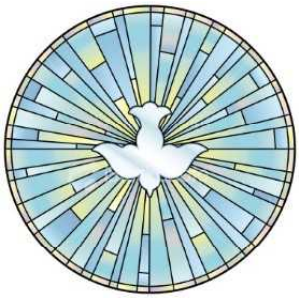
取られて、それが新たな誕生に向かっていることをなかなか理解できません。キリストの苦難（十字架）は「救い」ための産みの苦しみでした。救いは「復活」とともにその完成が高らかに宣言されたのです。戦争の混乱や迫害と苦難の中で、つまり終末的混乱の中で信頼すべきものは何でしょうか。それはキリストの言葉です。１３章２３節で主イエスはこう言われるのです。「一切の事を前もって言っておく。」主イエスが語られた言葉、生前に語られた言葉、今も聖霊を通して語られる言葉、み言葉をたよりに、わたしたちは、まことの羊飼いであり、教会と共におられる(έγω είμι)キリストの後に従って行くのです。

２つ目の「気をつけていなさい」が９節に出てきます。９－１３節。13:9 あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。13:10 しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。13:11 引き渡され、連れて行かれ

るとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。13:12 兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。13:13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

明らかに迫害と苦難の日がやって来ると語られています。しかしその困難の時は、同時に証しの時だとも言われています(v.9)。証言(μαρτύριον)のために連行されて、地方法院（サンヘドリン）や会堂で罰せられ、さらに総督や王の審きを受ける。しかしその苦難の時こそ、福音を証する機会でもあるのです。証言する(μαρτυρέω)という言葉から、証言者とか証人(μαρτύς)という言葉が派生してきます。そして後にこの証人(μαρτύς)という言葉は、キリスト教の世界では「殉教者」を意味する言葉になりました。主イエスはこう言われます。「わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる」(V.13)。キリスト者が人々の憎悪の対象となる時が来るのです。「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう」(v.12)。家庭に亀裂が生じます。証言は、兄弟の間に、親子の間に、死さえもたらす、と明言します。

言語に絶する苦難がキリスト者を襲うとき、その時こそ、キリスト者は「聖霊の助け」をリアルに経験することになります。それは、彼／彼女がキリストの証人(証言者)として立っている証拠です。



「引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ」(v.11)。証人(証言者)が語るべきことは、聖霊が教えてくださるのです。旧約聖書では、殉教者のような特別な人々に、特別な時に、例えば裁判の場において、特に驚くべき信仰の表明に対して聖霊が送られます。しかし新約聖書では、聖霊は、教会の全員に与えられており、信徒の特に奇跡的

とは見えない日常的な生活の中の表現も、聖霊によって支えられるのです。そしてこの小さな証言が世界宣教につながるのです。

マルコにとって、全世界に福音を宣べ伝えることは中心的な重要事項であったのです。①４章３０－３２節。「4:30 更に、イエスは言われた。『神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。4:31それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、 4:32 蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る』」。そして②１１章１７節「11:17 そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちは、それを強盗の巣にしてしまった」。そして③１５章３９節「15:39 百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った」。十字架の刑を執行したローマ兵が、信仰を告白します。世界宣教はもう始まっているのです。主イエスの苦難が、ローマ兵の信仰告白へとつながったように、信徒の経験する迫害と苦難は福音を世界に広げる一つの契機としてとらえ直されているのです。そして新たな信仰の次元が、苦難とともに、開示される日がやがて訪れるのです。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」（v.13）。

繰り返しますが、マルコによる福音書１３章の「小黙示録」は世界の終わりを語ります。終わりに際してわたしたちは、「気をつけなさい」と呼びかけられています。「小黙示録」は「気をつけなさい」と語りかけることによって、わたしたちの生き方を、世界の終わりとの関係において「終わりから今を生きる」ように迫っているのです。（終わりを意識して今を生きるように迫っているのです。）「小黙示録」の語る「世界の終わり」

と「主イエス・キリストの生涯の終わり」が二重に重ねられ、そこに、わたしたちの(確実に終わりが待っている)「終わりある生涯」とが三重に重ねられた時、わたしたちは、この「小黙示録」のメッセージの深みに近づきます。

最初に紹介した樋野興夫先生が仰る「がんという病と共存する生き方」は「自分の人生の終わりを静かに受け止める」生き方に通じます。しかし自分の終わりを静かに受け止めた人こそが、主体的・能動的に人生を生き始めるのです。人生の断捨離、どうでもいいものを捨てて、優先順位を徹底的に変更することによって、自分の人生で最も大切にするべきなものに向かって能動的に働きかけを開始するのです。そのとき彼／彼女は、病気ではあっても病人ではなくなるのです。

樋野先生の本の中に『種を蒔く人になりなさい』(2019)という本があります。その中に星野富弘さんの詩が引用されています。この様な詩です。「いのちが一番大切だと思っていたころめ／生きるのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った日／生きているのが嬉しかった」という詩です。自分という焦点(定点)とがんというもうもう一つの焦点(定点)、この二つの焦点(定点)によって形作られる楕円としての人生。がんの患者さんが、終わりを意識しつつ、能動的に、楕円の外に向かって言葉や行いの小さな種を蒔き始めるのです。自分の生命が、その生命より大切なものに繋がって行くのです。蒔かれた種はやがて別の生命を生みだし、他人を生かすものとなるのです。

福音宣教とは何か大仰なキャンペーンを仕掛けることとは違います。わたしたちも、がんではなくとも何かとすぐに解決できない問題や課題を抱えているものです。そんな問題や課題と共存しつつ、キリストを信じて生きる喜びを、小さな愛の業に託して、福音の種として蒔き続けることなのです。今与えられている時をかけがえのない時として自覚し、新しい一週間も歩んでまいりたいと思います。祈りましょう。

2019.5.19 日本基督教団千歳丘教会

13:5 イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。
13:6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。
13:7 戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。
13:8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。
13:9 あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。
13:10 しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。
13:11 引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。
13:12 兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。
13:13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

13·5 ὁ δὲ Ἰησοῦς ἤρξατο λέγειν αὐτοῖς, Βλέπετε μή τις ὑμᾶς πλανήσῃ·
13·6 πολλοὶ ἐλεύσονται ἐπὶ τῷ ὀνόματί μου λέγοντες ὅτι Ἐγώ εἰμι, καὶ πολλοὺς πλανήσουσιν.
13·7 ὅταν δὲ ἀκούσητε πολέμους καὶ ἀκοὰς πολέμων, μὴ θροεῖσθε· δεῖ γενέσθαι, ἀλλ᾽ οὔπω τὸ τέλος.
13·8 ἐγερθήσεται γὰρ ἔθνος ἐπ᾽ ἔθνος καὶ βασιλεία ἐπὶ βασιλείαν, ἔσονται σεισμοὶ κατὰ τόπους, ἔσονται λιμοί· ἀρχὴ ὠδίνων ταῦτα.
13·9 βλέπετε δὲ ὑμεῖς ἑαυτούς· παραδώσουσιν ὑμᾶς εἰς συνέδρια καὶ εἰς συναγωγὰς δαρήσεσθε καὶ ἐπὶ ἡγεμόνων καὶ βασιλέων σταθήσεσθε ἕνεκεν ἐμοῦ εἰς μαρτύριον αὐτοῖς.
13·10 καὶ εἰς πάντα τὰ ἔθνη πρῶτον δεῖ κηρυχθῆναι τὸ εὐαγγέλιον.
13·11 καὶ ὅταν ἄγωσιν ὑμᾶς παραδιδόντες, μὴ προμεριμνᾶτε τί λαλήσητε, ἀλλ᾽ ὃ ἐὰν δοθῇ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ τοῦτο λαλεῖτε· οὐ γάρ ἐστε ὑμεῖς οἱ λαλοῦντες ἀλλὰ τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον.
13·12 καὶ παραδώσει ἀδελφὸς ἀδελφὸν εἰς θάνατον καὶ πατὴρ τέκνον, καὶ ἐπαναστήσονται τέκνα ἐπὶ γονεῖς καὶ θανατώσουσιν αὐτούς·
13·13 καὶ ἔσεσθε μισούμενοι ὑπὸ πάντων διὰ τὸ ὄνομά μου. ὁ δὲ ὑπομείνας εἰς τέλος οὗτος σωθήσεται.